
馬鹿で出来る創造神

美空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿で出来てる創造神

【Zコード】

Z4360V

【作者名】

美空

【あらすじ】

神様つてさー、人に土下座していいの?え?ダメ?でもさ.....

私の目の前見てよ。神様が土下座してるんだよ?

神様に誤って殺された、不運な少女、

月乙女颯華 つきおとめそうか のお話です

残酷な描写ありは保険です。きにしなくておく。

戦闘描写少ないかもです。そこは妥協をお願いします()殴
主人公スペック多いと思われます。

2011年11月22日、第16部を編集しました。

プロローグ（前書き）

プロローグ

……神様って、気高くて神々しくて……
何よりも、尊敬できるって感じするよね？

……でも、今私の目の前に居る神様は……
馬鹿の塊で、おちゃらけて……尊敬なんかできません、って感じ！
こんな奴を尊敬しろなんてさ、無理だよね。
だってさ、考えてみてよ？

「いやあ、『じめん』『じめん！』

なんて神様に言われてみ？

「はあ？」

って言ひちゃうでしょ！？

宗教馬鹿にしてるわけじゃないよ？
でもさ……うん。

こんな奴、神様でいいの？

って思ひちゃうわけですよ。

土下座して平謝りしてるんだよ？

神様がだよ？

「え？」

ってなるよね？

少なくとも私はなった。

で、いい加減教えてくれないかな？
何で神様が私に土下座しながら平謝りしてる理由を、や。

プロローグ（後書き）

短い……

次は長くしないとなあ……うん。

誤字・脱字等あつたらお知らせください。

現状整理

よし、現状整理をしよう。

私は今、何も無い真っ白な空間に居る。

制服を着て。

まづ、私は月乙女颯華。

緑桜女子学院高等部二年、緑桜学院幼等部の頃から学院に在籍している。

月乙女財閥長女、次期当主

うん、記憶はちゃんとある。

じゃあ、今朝は何をした？

6時に起床して、食堂で「」飯を食べて、1時間30分ぐらいパソコンで嫁と会つてた。

7時半に寮を出て、いつも通り校舎へと足を進めた。

で、朝の学活が始まるまで友達と喋つて、朝の学活が終わって授業を受けた。

放課後になつて、集めてる本の新刊が出るから町に出て、本屋が目の前つてところで……

ああ、大型トラックが向かつてきて……

「私、死んだんだ……」

改めて現状整理すると、寂しいな……

嫁たちに会えないのが。

今朝、あの子と会つたからいいけど……

はあ。

でも、私が歩いてるときにトラックはいなかつたと思つんだけどな?

しかも、トラックの運転席に入居なかつたし……

じゃあなんで、こつちに向かつってきたのかな?

私の馬鹿な頭脳じゃわかんないけどさ……

ん
……

わからん。

てか、本結局買えてないじやん。

うわ、私哀れ。

いや、死んじやつた時点で哀れなんだけど。

なお哀れじやないか。

……さて、現状整理は終わつたのだが。

私の目の前で、土下座して一言も話さないこの人は、

誰なんだい？

神様の謝罪内容

「本つ当にすみませんでした！……！」「何が？！」

うん、訳を教えて欲しいって言ったのは私だよ？でも、訳を教えて欲しいのであって謝つて欲しいわけじゃないんだが……

「謝つた訳を話して下さー」

「怒らない？」

何？私が怒るよ「うなことなの？」「場合によつては怒るかも」

「…………取り敢えず、話すね。

えつと、君は死にました。死因は交通事故です。それで、その交通事故は…………僕の所為です。」「今、何か変な言葉が聞こえたなあ。交通事故は、「イツの所為？」

「チツ

「へえ、君の所為なんだ？……覚悟はできてるよね？」

「できてなくとも、ボコすけどー！」

以下、音声だけでお楽しみください

「ギヤースーちょつ、タンマタンマー関節はそつちこね回りない

！痛い！ちょ、真面目に！

痛いって！うわ！骨折れるって！グハア！」

「グハア？ 気持ち悪い」

「君の所為だろうが！」

「ふーん、私の所為なんだ。

「私を誤つて殺したのは誰かなあ？」

「…………僕です。」

「分かつてんじやないの。で、貴方は何者？」

「神です」

「紙ね、分かつた。」

「ネ申……」

「神？」

「そう！ 神様！」

「こいつが神様あ？」

「うん！ 僕は創造神！ 最高位の神だよー全ての生みの親さ

がムカつく。

ウザいよ。

「…………私をここに呼んだって事は、何か話したいことでもあるんじやないの？」

「あ、ありますあります！」

「そう、じゃあ手短に10文字以上10文字未満で言こなさい。」

「無理です。」

「即答ですか。」

「はい。」

「…………じゃあ、20文字以上で言こなさい。」

「僕が誤つて殺してしまつたので、好きな能力をつけて異世界に転生せます。」

「長い。」

「未満は言つてません。」

「言つてないからね……」

好きな能力をつけて異世界に転生せん、か……

面白そうじゃないの。
行ってもいいかな。
寧ろ行きたい。
よし、行こうか。

神様の謝罪内容（後書き）

短くてすみません。

誤字・脱字等あれば教えてください。

異世界に行こうか！

「転生、ね……なに？赤ちゃんから？」

「そうなるかな。大丈夫、ちゃんと5歳までは記憶消しとくから」「そう、ならないわ。」

羞恥プレイは嫌だから、ね。

誰だつて嫌でしょ、自我があつて記憶もあるのに赤ちゃんの体験しなきやいけないなんて。

「……で、能力だけど……」

「そうだなあ、「想像具現化能力」、「神力」かな」

「ま、そんぐらいならいいでしょ。それから、僕の力の一部を渡すね。

一応創造神の力の一部だから、世界史上最強だから。

内容だけど、「身体能力強化」「全知識」「言語」「法則・適正属性無視」「魔力等無限」かな

チート能力キタ

!!!!!!

「うん、チートじゃないからね。それに、君の体が拒否反応を起さないから

こんな力あげられるんだからね。まあ拒否されても身体いじって入れるつもりだつたけど。

ああ、それからね、「性別操作」「種族操作」「不老不死」「不死操作」も入れといたから。

「種族操作ってなに？他はわかるけど。」

「ああ、たとえば今、君は人間でしょ？」

それが、念じれば龍族にも獣族にもエルフにも精靈にもなれるつ

て事。

「神にはなれないけど、天使・悪魔にはなれるよ。」

「へえ……」

「君の事は神＆天使・悪魔に言つておくから。」

「あ、それはご丁寧に。」

「いえいえ。持つていきたい物は？」

「持っていきたいものか……たくさんありますぎで困る。」

「ああ、全部データ入力すりやあいいのか。」

「パソコンで、ケータイと本の内容を全部入力して。」

「はいはい」

「ウザいな。」

「したよ。ついでに、僕の知識も入れといたから、全ての事がわかるよ。」

「なんですか、この神。私優遇されすぎでしょ。
てか、とかとか好きなの？」

「別に好きではないかな、気分？」

「へ、へえ……」

「僕のメールアドレスも入つてるから、いつでも連絡取れるよ。」

「あ、それはありがたいかも。」

「そう？」

「うん！」

「じゃあ、落ち着いたらこの扉をくぐつてね。行けるからさ、向こうの世界に。」

「了解。ねえ、私、5歳になつたら捨てられる運命にじとじてくれる？魔力無しでさ。」

「ん？ああ、いこよ。そっちの方が動きやすいもんね。」

「やうこり」と。……じゃあ、行ってくるね
「行ってらっしゃい。それから…………君は、現世で居なかつた事
にしておくれよ。

本当にいめん。」「……有難う。気にしてなこよ。またね

異世界に行こうか！（後書き）

うわ、会話文多い。

人物が3人になれば、台本書きになると思います。

誤字・脱字等あればお知らせください

五歳の誕生日

* * * * * 赤ちゃん歴史飛ばします* * * * *

今日は私の五歳の誕生日！父様も母様もお優しい方なんです！
申し遅れました、私はレティウル・ドラグネス。闇属性の八大貴族
の一柱です！
通称レルですね。

もういい？いいよね？いやあ、朝、目が覚めたら記憶戻ってるんだ
もん、吃驚だよね。

まあ神がそうしてくれたんだけど。
で、魔力検査があるわけでして。
結局家を出るから、お供が欲しい。
探そう。まずは自分の力を見つけて……

……

？

居た。

「

出て来て、疾風 シルフ

」

疾風は今即興で私が付けた。
異論は認めません

『マスター呼びだしてくださつて有難う御座います』

おおう堅苦しい。

「ん。疾風、私の中に居たから私の事は知つてるよね?」

『はい。マスターの持つてゐる情報、力等、私が管理してゐます。それから、マスターには五時間以上の休息は必要ありません。私はまだ未熟なので五時間ですが、慣れれば一、三時間でマスターの疲れをとり、

体調、力等を整える事ができます。』

「わかつた、ありがと」

疾風つて……いいなあ。なんか。

くそう、妹に欲しいぜ!

弟は居るのにな。

「姉さん、遊ぼ?」

噂をすればじやないか。

名前はリディウル・ドラグネス。通称リル。

私の双子の弟。若干シスコンか?

ちなみに魔法属性は闇、火、風と見た!

「いいよ 何して遊ぶ?」

「ん……じゃあさつ鬼ごつこ!」

「鬼ごつこ? いいよ! じゃ、私鬼やるね!」

「うん!」

「いくよー? いーこ「レル」母様!」

「これから魔力検査をやるわよ^_^
リル、鬼ごっこはまた後でね？」
「「はいー。」」

魔力検査、か……

「父様の書斎でやるから、分かるでしょ、う。
先に行つてるわね」

「はいー。」

……リルには、囁ひでおい……

「リル。」

「何？」

「私ね…………もうリルと鬼ごっこできないの…………」

「…………どうして？」

「私はね、魔力が無いから…………だから、多分魔力検査で無いってわ
かつた時に、

追い出されると思うんだ。」

「そんなの、そんなの！やだよー僕、姉さんと一緒に鬼ごっこやり
たい！」

「私もやりたいよーだからや……

大きくなつて、また会おうよーその時には強くなつてるから！
会つて一目でわかるよつに、これ、持つててね？絶対だよー約束

だよー！」

「…………うん…………うん！じゃあ姉さんはこれ持つてて！」

「わかつた！…………リル、またねー。」

リルから貰ったのは、真ん中にダイヤが付いたシンプルなネックレス。

私があげたのは……

『防御魔法陣を組み込んだ同じダイヤのネックレスですね。』

私が作つたんじゃなくて、神様に貰つたヤツ。いらないし。

いや、結果も見えてる魔力検査に行きますか！

『皆さん想像が付くと思つので飛ばします』

いやあ、予想通りで困るね！

あの両親の顔ときたら（笑）

で、テンプレだとここで強力な敵が来てー、王様かギルドマスターが来てー

拾われて養子になつてー、最強になるみたいな？

『マスター、前方10キロ離れた地点から邪龍族王竜が鬼のようない形相で向かつてきています。』

『ひひひ倒しても意味ないから、ぼーっとしてよ。』

ぼーっと。

五歳の誕生日（後書き）

中途半端な終わり方ですみません（汗
誤字脱字等あればお知らせください

マスターについて（前書き）

今回は説明と書い方などで、短いです

マスターについて

初めまして、マスターのお付き?といつかお供?と言つか、取り敢えず精靈、疾風^{シルフ}です。

今回は、私がマスターについて説明いたします!（因みに、物語に合わせて編集します!）

名前 ベルレイン・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ

旧名 レディウル・ドラグネス 別世界での名前 月乙女颯華

地位 イグヴィウ王国第一王女、第一王子婚約者

種族 天使族・神に最も愛でられし者

家族構成

父・ベルスチア・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ
母・レトルーチェ・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ
兄・スチアレー・ヴェ・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ

誕生年月日 碧耀歴1978年処女月30日

年齢 12歳

能力 想像具現化能力……名前の通り、想像したモノを具現化させる能力です。

能力 想像具現化能力……名前の通り、想像したモノを具現化させる能力です。

ただし、物を通してなら可能です。（ボ

モン、遊 王等)

神力……魔力、靈力、妖力等を一まとめにした物です。

身体能力強化……説明しなくても解るております。

全知識……創造神が持つて いる知識の事です。私が管理して います。

言語……別名翻訳能力です。言葉を理解し、話し、書くこと ができます。

ただ、全知識があるので別に無くても支障はありません。

せん。

法則・適正属性無視……術等の法則、属性反応の無視です。

マスターは属性・術・技を気にすること無く発動可能です。

魔力等無限……神力の無限です。

性別操作……男・女の切り替えです

種族操作……前話参照です(別に説明が面倒臭いわけじゃないですよ!)

不老不死……説明しなくても解るとおりです

不老不死操作……不老不死を解除することができます。

また、年齢操作もこれに分類されます。マ

スターは現在、

不老を解除しています。

使い魔 邪龍族王竜・王竜長兼魔族長「フィジア」偽名・ループ

(マスターとの契約により、邪龍ではなく、聖龍となりました)

マスターの脳を具現化したような精霊「疾風」<シルフ>

道具 マスターの所持品

別世界の情報・好きなアニメ・写真・イラスト等が

詰め込まれたパソコン

リルさんに貰つたダイヤのネックレス

マスターの強さ

性格について

かなーり天然で鈍感でお人好しです。

この人、疑うて事知てんの? てぐらい純粹です。

て感じです。

対処法もバツチノです。

頭腦

IQ2000以上の天才です。

悪知恵も知つていればよく働きますが、悪知恵と言う事を知らないので働きません。

身体能力について

今のマスターが体力テストをやれば、

100メートル走 3秒

反復横とび20秒 1000回

上体起上30秒 500回

立ち幅跳び 5キロ

シャトルラン（20メートル） 1900回

という結果になります。

公表された内容

名前・ベルレイン・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ
誕生日月日・碧耀歴1978年処女月30日
年齢・5歳
魔力量・九千万（第一王子の最初の魔力が八千五百万）
属性・水、風、土、氷、光、植物、時
使用武器・堰月倫

今公表されている内容

名前・ベルレイン・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ
誕生日月日・碧耀歴1978年処女月30日

年齢・12歳

魔力量・一億五千万（第一王子の現在の魔力が九千五百万）
属性・水、風、土、氷、光、植物、時

使用武器・堰月倫

職業・第一王女・第一王子婚約者、召喚魔術師、フィジオ学園得待生

また、最近ではギルド「天の翼」で、「理を支配せし姫」という二つの名を掲げて、最強夢双状態ですね。周りからは「理帝」^{リティ}って呼ばれているようです。

邪龍族王竜の長に会いました

はい、ぼーっとしました。

え？ だつて、ぼーっとした方がテンプレ通りの捨てられ貴族じゃん？

邪龍族王竜だつたら、ギルドマスターだらうが王様だらうが倒せるでしょ ｗｗ

『……あの、非常に申し上げにくいんですが……あの王竜、邪龍族王竜の長で、その……』

嫌な予感しかしないなあ

『お腹が空いて怒り狂つてるので、めぢやくぢや強いです

嘗めてんのー？

別に倒さなくてよくね ｗｗ

てか王竜の長とか ｗｗ

この世界の生物で一番強いじゃんか ｗｗ

王竜の長つて魔族も治めてんじゃん。

「あ、なんかもうすぐ田の前にいる。そこの邪龍くうううううううん

！」

取り敢えず叫ぶ。

「誰だ、貴様は……！？ 貴様、余程我に喰い殺されたいのか？！」

「誰が ｗｗ で、お腹空いてんでしょ？」

「それがなんだ！ 我は腹が減つてーるー貴様、我の生贊になればよ

いー！」

「嫌だ そーだ王竜の長君、何が好き?」「話を私がリードすれば私の勝ちさ!」

「フン、我の好きなものなど、

……カレーに決まってるだろ!うがー!】

あ……カレーなのねwww

「カレー? カレーなら作れるよ?」

「ちょっと待ってね。」

じゃ、この世界で初めて能力使います　ｗｗ

「はい、カレー。言ってくれればもっと出せるから。」

なんか王竜の長、フリーズしてるけど。

『そりや、目の前で創造能力使つたら誰だつてそなりますつて！』

そうなの？

ハツハツハツ

気にしない気にしない

「食べないの？」

「食うに決まってるだろ！が！」

20分後

「ホントにお腹空いてたんだねえ、王竜の長君？まさか大盛り100皿食べるなんてｗｗ」

「悪いか？それから、我是フイジア。なにが王竜の長君だ。確かに王竜の長だが、我にはちゃんと名前がある！」

「フイジア？」

『邪龍族王竜、王竜の長兼魔族魔王、フイジア。

その性格は破天荒で児貴分。そのため部下からは慕われる。

過去も現在も使い魔にされた事はなく、その理由はフイジアが強すぎるため。

また、争いは好まないが、空腹になると暴れまくつて取り敢えず何か食べようとする。

好物はカレーで、嫌いなものはフェンリルの肉の煮込み。

魔力量は1000京、属性は火、風、水、土、雷、氷、闇、光、

王。

ちなみに、本気で怒るとカレーを食べないと怒りが沈む事が無い。人化すると、憎まれの対象どころか敗北感がドドッと訪れるほど のイケメンになる。

竜としての年齢は軽く250歳。だが、人間としては14歳。

つていうのがフィジアの情報ですね『

何このチートww

この世界の平均魔力量つて五千万でしょww
人間で一番多いのがギルドマスターの五億でしょ?
どんだけなのww

フィジアを使い魔にしました。移動手段ゲットです。（前書き）

戦闘描写あります。

ですが、私は戦闘描写が苦手なので、グダグダになります。
一応結果はサブタイトルに書いてあるので、
この話はスルーして頂いて結構です

「フィジアを使い魔にしました。移動手段ゲットです。

「お主、名を申せ。」

「あ、貴様じやなくなつた。

「どうして？」

「精靈は連れてるしカレーは一瞬で出すし我を前にしても怯える事なく話している。

「何者だ？」

「ふんふん、要するに私の事が知りたいと。

「ま、いいでしょ。私の名前はレディウル・ドラグネス。」

「！？闇の貴族筆頭ではないか！何故、その令嬢がこんなところにいる？！」

「いやあ、貴族が面倒臭かつたからね？魔力流せつて言われても流さなかつたんですよ。」

長くなるので割愛。

（小説つて便利だね！）（マスター言つちやだめです！）

「フム……俄かには信じられないんだがな。

実際にその能力を見せてもらつたわけだし。」

『疑問に思うなら、マスターと戦えばいいじゃないですか？』

おーいーいーいーいーいーいー！？

何故そつなる？！

「その手があつたか！」

納得すんな！

「……で、結局やるのね……」

「ウム！早く用意しろ！私は早く戦いたくてウズウズしているんだ

!」

「はいはい。」

戦闘狂ですかい！？

『じゃ、始め！』

「超電磁砲って、知つてる？」

「……は？」

やつぱり知らないよね~

知つてたら怖いよ（笑）

「いついつの、だよ？」

コインを創造して、電気を纏わせて…… ひとつ

1・2・3

「セーのつ」

はい、ティコピンで飛ばします

『マスター、結構楽しんできません？』

あれー、幻聴が聞こえるなあ

「ちょ、速いって！」

あれ、キヤラ崩壊？

じゃ、続けて、

「私の一番新しい相棒、出してあげるよ」

「はい、ポーモンですな。」

私の一番新しい相棒は、感^{ランクルス}なんだな

「感。サイコキネシスでよろしく」

いやね、確かに楽しんでるよ？

5歳の子供が王竜、しかもその長を倒したら凄いじゃん？

「うわっえ、ちょつタンマタンマ！」

「いやだ。じゃ、いつからは自分の力で行きますかね！梅ヶ枝！」

ルコムの空の跡の主人公の武器ですねー。

できるかね？

「奥義……太極輪！」

おつ、出来た出来た

あれ、もう終わり？

フィジアって……

「我が弱いんじやなく、お主が強すぎるんだからなー。」

「はいはい。あ、そうだ。私と使い魔契約、してくれない？」

「なんで」

「え？ だって、移動手段はあつたほうがいいし、使い魔が居ると何かと便利でしょう？」

『……私じゃ、不満なんですかね、マスターは……』

あ、疾風の性格ネガティブに設定してたの忘れてた。

フォローに困るよね、ネガティブは。

ま、私が設定したの私だから文句は言えないけどさ。

「そんなことないよ？ 私、疾風が居てくれて凄い助かってるよ？」

『（パアアアアアア）本当ですか！？ 有難うござりますー。』

単純

でも、疾風が居なくなつたら、私鬱状態になるかも（笑）

「で、結局どうするの？」

「……いいだろ？、

我、王竜、魔族を治めしフィジア也。

この者、レディウル・ドラグネスとの契約を求める。

契約するならば、右手を挙げよ。

我は汝と共に生涯を共にし、

我は汝と共に苦難を乗り越える覚悟ができる。』

『……汝、レディウル・ドラグネスに、契約を求める。』

右手を挙げて……

「我、レディウル・ドラグネス。

このモノ、フィジアとの契約を承諾する。』

あーもう堅い。

堅つ苦しいなあもうー。

「我の瞳に魔力を流せ。」

「ういー

瞳に魔力を流して……

お？人化した！

なんだこのイケメソ！

14歳くらい？

『人化したのは久しぶりだな……』

『じゃ、これからよろしくね！』

「フィジア！」

『ウム。こちらこそよろしく頼むぞ。レディウル。』

『あ、レルでいいよ。で、フィジアの偽名考えないとね……その口

調も直すこと！』

『ど、努力する』

『ん 疾風、何がいいかな？』

『フィジアさんのですよね？』

『てなわけで、疾風と話し合い！』

10分後

「『決まったよー！／＼決まりましたー！』」

「発表します！」

『フィジアさんの偽名は 、』

『『ループだよ！／＼です！』』

意味はない！

うん、意味はないよ！

『ループ？わ「ん？！」俺はこれからループと名乗ればいいのか

？』

「そう！」

『ループ……わかつた。』

ドラグネス家に捨てられた今日、
新たな仲間が加わりました

世界観についての説明です！

世界名 「デジタルベイスト」

管理者名 上位神・第36位魔術を司りし神筆頭補佐・イグニル

科学ではなく、魔法が発達した世界。

また、この世界は一つの大陸しかなく、その一つの大陸が一つの国である。

魔法属性 「基本属性」 火、水、土、風、雷、氷

「対極属性」 光、闇

「特殊属性」 植物、時

魔法階級 弱い順から 初級 家事用、軽い模擬戦等で多く使われる。誰でも可能。

中級

学院で習うか、魔導書で覚えられる範囲。誰でも可能

上級

学院で習うか、使い魔に教えてもらひうか。誰でも可能

うか。努力すれば可能

魔導書を解析するか、使い魔に習うか。研究所に行つて魔導書を解析。S

SSランク以上なら可能

天級 最上級の使い魔に習う。Rランク

古代級 自力で魔導書を解析して頑張るか、が使用可能

神級の使い魔に習う

帝がなんとか使用可能。

禁忌級 手を出してはいけない階級。フイ

ジアは全然オッケー。

らかの犠牲を伴う。

魔導書が出されていないうえ、何

疾風も何気に対応する。

人間で現在使えるのはレルのみ。

天滅級 上に同じ
神滅級 上に同じ

使い魔階級 弱い順から 下級 属性獣、またその子供
中級 獣の子供、精霊の子供
上級 獣、靈獣、精霊
最上級 属性神の子供、精霊王達、獣王、
王竜、神獣

神級 属性神、神獣王、フィジア、疾風

国名 「イグヴィウ」

王の名前「ベルスチア・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ」

憲法 第一条 奴隸は一切禁ずる。

第二条 12歳～38歳は学園に通う。

第三条 無闇な争いはしないこと。

第四条 先祖、両親を敬う。

第五条 何が何でも感謝の気持ちだけは忘れないこと。

ギルド 「息吹」

唯一のギルド。

ランク 下から E , D , C , B , A , A , A , A , S , S ,
S S S , X , X X , X X X , J , R , H , G , R H , R G

帝 火帝、水帝、土帝、風帝、雷帝、氷帝、光帝、闇帝、植帝、時
帝。

全員RHランクで、闇帝はギルドマスターが務めている。

火帝がそろそろ辞め時なお年頃。

使い魔は全員属性神の子供。

火帝、土帝、雷帝、闇帝、時帝は男。

水帝、風帝、氷帝、光帝、植帝は女。

七大貴族 火の「フレア家」、水の「アクラ家」、土の「ガイア家」
風の「フィル家」

光の「メーバ家」闇の「ドラグネス家」は國民から慕わ
れ、

國からも絶大な信頼を寄せられている。

ただ、闇の「ドラグネス家」が長女を捨てた事は、貴族、
國民は知らない。

雷の「ボルト家」は極悪非道、傲慢、無駄に権力を使う

ので

國民から嫌われていて、國からも信頼されていない。

氷は王族が担っている

学院 「フィジオ学院」

初等部から高等部まである、エスカレーター式の学院。

入る物拒まずの学院で、人気がある。

國民が（貴族含む）入りたがるのは専ら此処。

「デレス学院」

初等部から高等部まである、エスカレーター式の学院。

入る物選び、それも実力があつても上位貴族だけしか入れ

させない。

そのため人気が無く、入りたがるのは大体「ボルト家」とそ

の血縁ぐらい。

学園に通う年齢は、12歳から38歳まで。

1 2歳～20歳	初等部
2 1歳～30歳	中等部
3 1歳～38歳	高等部

問題ぐらい。

碧耀歴 「イグヴィウ」第一の王が定めた年月の考え方。一年が390日。

寿命は男女ともに200歳前後

月 別世界とは違い、十三の月がある。

一月	白羊月
二月	金牛月
三月	双児月
四月	巨蟹月
五月	獅子月
六月	処女月
七月	天秤月
八月	天蝎月
九月	人馬月
十月	磨羯月
十一月	宝瓶月
十二月	双魚月
十三月	蛇使月。

曜日、お金は別世界と同じなので割愛

世界観についての説明です。（後書き）

訂正する可能性があります。

半分強制（前書き）

今回は、限りなく。恐ろしく。短いです。
そして、終わりが中途半端です。

半分強制

幻聴が聞こえる

声からして、十歳前後で、男子

少なくとも
今の私よりは年上だね

で
声に置いたにと助には行かなし

い」と影の最強になつて

『アマタニ、此の御用で下されば、一で御用?』

疾風、そこはつつこんじやいけません。

二三の尺

「聞こえないふり。」

『誰に手を貸すが?

『レルよ、行かぬのか』

なんだよ、そのジト田は。
私は何も聞いてないんだよ。
見ざる言わざる聞かざる！
フラグには手をつけないんだ！

『第三回』

『（ジテ三）』

……

「あーもう！ 行けばいいんでしよう、行けばー？」

『さすがマスター！』

『では、行くとじよづか』

『何がさすがだ何が！

半分強制だらうが！

「どうなつても知りないからねー出でといで、聖夜ー（トゲキッス）

『声がしたのは南南西に五百メートル、です』

「だつてさ。聖夜、声を辿つて。」

【了解】

……あ、ポケモンと会話可能なのね。

第一回（前書き）

短いです。中途半端です。

第一王子

……たてさて、半強制的にこちらに来たわけですが。
別にそこまで騒ぐ必要無くね?って言つ感じの、それはそれは勇ま
しい大狼が居る訳です。

『そう思つのはマスターだけですよ? 使い魔階級で言えば中級。
魔獸階級で言えばBランクです。』

「これが?」

『だめだ、ループと戦つて? から、感覚が鈍つてゐる。
『それでは、俺が化け物みたいではないか。』
『?違うんですか?』
「違つの? ってか、心読むなっつの?』
『『『声に出てました? 出てたぞ?』』』

＼(०)／ (० ०) -

「そーて、男の子?を助けに行こつかー。」

『話逸らしましたね！？』

『む……』

『気にならない気にならない

「あ、いたいたー。」

さてと、演技でも開始しましょつかね

「君、大丈夫？」

？「……つ、

「意識はあるね 名前は？」

？「……スチアレー・ヴェ・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィ
ウ……」（以下、レ）

王族キタ

！

しかも！第一王子！てことは……八歳？

助けなければ不敬罪！？　ｗｗ

「記憶もあるか……じゃあ、どうしてここに居たの？」

レ「…………／＼／＼（プライツ

「？」

『マスター、深く追求しないであげてください。』

『ああ、このくらいの年頃なら仕方ないだろ？』

……？

ああ、解つた解つた！

冒険ね！

「……一人で帰れる？」

レ「……無理。立てない」

：痛めたか……

仕方ない、送つてくしかない。

それにしてもこの王子つ

可愛い！何この子！？完璧なる男の娘つ！

「じゃあ、送つてくよ！何処まで？」

レ「……王宮。門の前でいい。」

「了解！じゃ、行こう？えと、」

レ「……ああ、レーヴェでいい。……お前は

「あ……、レディウル・ドラグネス。」

レ「……ドラグネス家の者が、なぜここにいるの……？」

へえ、もう七大貴族とかの事習つてんだ？そりやそりや、第一王子であるレーヴェは。

正統王位継承者、だしね。
大狼が警戒、強めてきた。

早く行かないと。

「……私、捨てられたからや～～貴族つて、力第一主義じゃじない?
で、そんなところが嫌になつてきただから。魔力流せつて言われて
も、流さなかつたの。

そしたら、

「我がドラグネス家に恥をかかせるな!」この魔力無し! 今すぐこの家を出て行け!」

つて言われたから、出てきた あ、好きな風に呼んでくれて構わないよ」

『（マスター、演技忘れてます。）』

レ「……そつか。取り敢えず、王宮まで頼むぞ、レイ。」

「レイ? まあいいか、はいよつー任せて 眠（ネムリ・種族スリーパー）!」

眠【……】

……眠 そうな顔してんな、コイツ。

もちつとシャキッとしろやシャキッと!-

……なんて言つた無駄だよね、コイツだもん。

あ、今の何気に失礼だつたww

「さて! レーヴェ、王宮を想い浮かべてね?」

レ「え? あ、ああ。」

「眠、『テレポート』」

さてと。

やつとこの森から抜け出せた!

なんか後ろから「ウォーン」と聞こえるけど気にしない気にしない。

気になら負け負け。

王宮つて、やっぱり豪華なのかな? 取り敢えず、着いたら拝みだい

う
か。

私は今、侍女さんに、無駄に大きいお風呂に入れられます。

無理矢理。お風呂位、自分で入れます。

「あの、本当に大丈夫ですから。」

「ダメですよ、レイ様っ！」

「それにですね、私たちの仕事が無くなっちゃいます。」

「レイ様の身の回りは、私どもにお任せ下さい！」

「……解りました」

……何気に？レイ？定着してゐるし。

どんだけ凄いんだレー・ヴェ・パワー。

『マスター、いいじゃないですか 第一王子に名前を『えて頂いた
んですよ！？』

いやいやいや、与えて頂いたんぢゃないから。

好きな風に呼んでいいよとは言つたけど、名前くれなんて言つてないから。

『あのですね！』の世界で、殿方が女性をあだ名で呼ぶなんて無い
んです！

呼ぶとしたら恋人同士が幼馴染、家族、または夫婦ぐらいです！』

へー、そんなのあるんだ。面倒臭いね。

で？それとこれとで、何の関係があると？

『マスター、いいですか！？？レイ？は、言わば第一王子が考えた
あだ名！

名前を与えて頂いたのと同じです！』

へーふーんほー。はいはい、少し落ち着くつね。

つと、やつと身体、洗い終わつたみたいだね。なんか後ろから、
すべすべしてて洗いがいがあつたわ！

うらやましいわ……

なーんて聞こえるけど気にしない気にしない。

「レイ様、お召し物はどれにいたしますか？」

「え？あ、じゃあ……お任せして、宜しいですか？」

「…………はいっ…………！」

不肯ライラ・バルドー！誠心誠意込めて選ばせて頂きますー！」

「よろしくお願ひします、ライラさん。」

別にそこまでしなくても良いのに、

『よくありませんっ！

マスター、もうちよつと自分が客人だという意識を持つて下さい！』

疾風。的確すぎる指摘を有難う。

そうです、私は客人でした。

いやあ、忘れてた忘れてた
ちなみに。

今、服を選んでくれている、元気で少し危なっかしいのがライラ・バルドー。13歳。

で、「それにですね、私たちの仕事が無くなっちゃいます。」が、お姉さんみたいに優しい雰囲気を持つてる、真面目で頭もよそうなのがエル・レイナ。13歳。

「レイ様の身の回りは、私どもにお任せ下さい！」が、

この三人のまとめ役で、なんと侍女長。ハイナ・エルフィーヌ。15歳。

貴族の方は、学校に行くも行かないも自由らしい。

ただ、跡取りは学校に行かなくてはいけない。

この三人は貴族で、跡取りの妹だから学校に行つてないらしい。勉強は皆できるみたいだけど。

てか、ハイナさんww

あんたどんだけ優秀なんですかww

ラ「レイ様。こちらで宜しいでしょうか？」

「…………可愛い。ライラさん、これがいいです。」

ラ「有難う御座います！では、エルとハイナさん呼んで来ますね。」

ライラさんが持つて着たドレスは、淡い桜色が上からグラデーションになつてて、

ドレスのすそには控えめにレースが付いてる。

全体的に、纏まりがあつていい感じ。

柄が裾の方に一つ、大きな蝶があるだけで、柄物が嫌いな私としては嬉しい。

でも。

「私、ピンク系着た事ないんだよね……」

『大丈夫です！絶対似会います！』

「疾風、あんたは何で興奮してるの……」

『興奮してませんよ？』

「してたでしょ。」

え？ループ？

ループなら、客室で待つてるよ？

『レイと疾風、遅いな……』

『謁見、大丈夫だろうか？』

心配性なループでした。

謁見 婚約者 養女？

エ「レイ様、これから陛下と謁見して頂きます。

その際ですが、レイ様流の敬意の表し方で結構ですので、
陛下に対して、無礼がないようにお願い致します。」

「あ、はい。わかりました。」

私流の敬意の表し方？

じやあ、向こうで習つたものでいい。つてこと？
てか、五歳児にそんな事要求しないでほしい。

あ、でも演技の事す――――――つかり忘れてたからいいのかな？
エ「あ、それとですね。レイ様が、殿下と共に、
この城に来る時に乗つっていた生物をすぐ出せるようにして頂いても宜しいですか？」

……私、何に乗つてきたっけ？

『聖夜です』

そうそう、聖夜だ聖夜。

結局、眠がテレポート失敗したから聖夜で来たんだっけ。

「わかりました」

疾風、よく覚えてたね。

凄いや。

『当然です。まだ、一時間前ですよ』

五月蠅いな、私は記憶力だけは無駄にいいけど
どうでもいい事だけは覚えないの！

エ「では、行きましょうか」

「はい！」

この人が王様……

威圧感半端ねえ。

お妃さまは綺麗だなあ……

田の保養になる……

「お初にお田にかかります。

元、ドラグネス家長女、レディウル・ドラグネスと申します。
この度はお忙しい中、私のような物のために時間を取ってください、ありがとうございます。」

……ああ、嘆かわしい。

何だつてこんなこと言わないといけんのを！

いやね、最低限の礼儀だけね！？

私は堅いの嫌いなんだよ！

わかる？！

わかんないよね！？

王「そんな堅くなるでない、レイよ。さて、気になる単語が出て来たのだが？」

「……元ドラグネス家長女、ですか？」

王「うむ。今日発表された限りだと、

ドラグネス家には長男、リディウル・ドラグネスしか居ない筈であるが？」

一週間たつて、ようやく発表されたんかい！

「はい。私は、そのリディウル・ドラグネスの双子の姉です。
いえ、元、と言った方がいいでしょ？」

王様もお妃さまも、眉間にしわを寄せないでください。

妃「どういう意味です？」

「私は、魔力が無い、という理由で捨てられました。
まあ、実際にはあります。

それを証明してくれるのが、疾風です。」

妃「疾風？何です、それは」

「私に仕えている精霊です。呼びましょうか？」

えつと、お妃さま？目が爛々と輝いているのはなぜですか？
この田は、「可愛いのかしら…？」って言つてますよ？

妃「お願ひ」

「わかりました。《疾風》私のところに来て、お妃さまに会つて貢うわよ》」

『はい、何でしようかマスター！』

早いなおい。

「まずは、陛下と妃さまに自己紹介。」

『はい！初めてまして、私はマスターの魔力によつて出来ています、マスターの精靈疾風です！』

簡潔に述べるとそつなるね。

もう少し詳しく言つた方が……

『詳しく言つと、私はマスターの魔力を五歳まで抑え込んでいました！

強すぎるので、母体にもマスターの身体にも悪影響を及ぼす可能性があつたんで。

私はマスターの魔力その物です。

で、今のマスターの魔力は、あの邪龍族王竜類王竜長よりも多いんです！

なんと、無限なんですね！それに、マスターは何故か天使族なんですよ！

おまけに、邪龍族王竜類王竜長、フィジア、偽名ループを使い魔にしたんです！

しかもです！マスターは、この一週間で神滅魔法まで使えるようになつたんです！

もう凄いですね！ちなみに、マスターの魔力である私も神滅魔法使えます。』

『疾風、最後にさりげなく自慢せんで宜しい。』

『はい、すみませんマスター』

あー、音声遮断結界と暗黒結界張つといてよかつた。大臣とかに聞かれたらただじゃ済まされないからね。

王「その話は本当かね、レイ

「本當です。』

妃「本当に？」

「はい。何だつたら、今ここで神滅魔法を放つても良いんですよ。」

それとも、天使の姿になりますか？

それとも、ループを呼びますか？」

王「……いいだろう、その話を信じよう。」

妃「さてと、お礼をするわね。」

王「先程は、アレン……スチアレーヴェを救ってくれて、」

妃「本当にありがとうございます。礼と言つては何なんだけど、」

王「アレンの婚約者に、」

妃「なつてみない？」

何ですかこの夫婦の以心伝心ぶりと言つた阿吽の呼吸と言つか。

それに、今レーヴェの婚約者？

いや、別に嫌じやないし寧ろなりたいぐらいなんだけど、

「私は、今は身元がはつきりしていません。」

妃「なら、ウチの養女になればいいわ。」

そんな即答しないでください、お妃さま。

反応に困ります。

確かに兄妹婚は認められますけど。

王「む、いいかもしれん」

王様もそこで納得しないで。

「……宜しいんですか？」

妃「いいわよ？」

王族になる＝世間に注目される？

目立つのは嫌いなんだけど、

まあいいか。

「じゃあ、みるしくお願ひします。」

あとで、ループに報告つと。

反対はしないと思うけど、取り敢えず報告つと。

あれ？ そう言えば、私聖夜出してないぞ？

そして?かじりかは知りんが七年後。(前書き)

短いです。
まあ、はい。

そして?かむりかは知らんが七年後。

「アルファさん、私、学園では護衛必要なんですけど……」
アルファさんは!

私の専属護衛で、年齢は23歳エリートである!

ア「ですから、レイ様。そういう訳にはいかないんです。」「だつて、護衛が居たら注もく「大丈夫です、貴族も護衛をつけますから。」はあ……」

どうしてそこまでして護衛をつけようとするかな?
なんで?

もしかしたら、レー・ヴェ兄様かな?
過保護だからなあ、うん。

「……分かりました、分かりましたからこの距離はやめましょう。
近すぎます。」

ア「え?あ、す、すみませんっ!」
明日から、学園か……

リルに、逢えるんだね。

「カバンよし。カバンの中身よし。制服も校則を守つてゐる。こんなもんかな？」

「え？ あ、《転移》で行けばいいじゃない、任務で行つたことがあるんだし」

私は今、世界で最強だと謳われる、ギルド「天の両翼」にて、「理を支配せし姫」って事で最強状態になつてます。無双だぜ「ルークは、精霊界でも天界でも好きなところに居ていよい。でも、学園には来ないでね？」

分かつてゐる。

魔力が多いから、召喚の方がよくね？ってことで、学園には？召喚魔術師？として行くんだからね。

下手にルークに出でてもうひやがや困る。

「疾風、あなたは姿隠してなさい。」

『はい、マスター！』

ア「レイ様、失礼しますよ？」

アルファが来た時。そこには、暇を持て余したルークしか部屋に居なかつた。

「学園長室は……つと」

この学園、無駄に広くな?

こんなに広くなくていいじゃん。

何でこんなに入組んでんの?

「お、みつけ。」

さつすが学園長室、扉も豪華。
無駄に金かけてるね。

「この魔力は……」

アイツか。
よし。

「せーの、ビリヤー。」

ドカッ

バキッ

「ふざやつ」

ズドオオオオオン

「やる気が感じられませんよ?」

やる気ないもーん

てか、変な声聞こえたんだけど?

幻聴だよね。

空耳だよね。

まさか、

「まさか、

が、？闇力の霸者？って言われてる、闇帝兼天の両翼ギルドマスター

「ココに居る訳ないもんね？」

— そのまさかだから ————— ! ! ! ! !

!

五戸蟬しよ 川ア川 黒れ

10

二〇

何たこい

○ が な が

山家集

九

卷之三

河で走なーから、腰汗をやつやつと垂つて。

「はい！あのですね、持待生の証の、このネクタイを着けて頂

۱۳۰۰-۱۳۰۱

ネクタイ?え、何?このリボンと変えんの?」

「いや、好きな所に着けてくださいされば！」

「あ、
はいはい！
わかつた。それだけ？」

「あと、この生徒手帳です。詳しく述べ

部屋は最上階です。」

「了解。じゃあ、寮の部屋行つてくる」

「ハイ！」

んじや
ね。
ああ、
それと。

敬語、ウザいよ」

!

後ろから叫び声が、横から叫び声に同情する声が聞こえるけど……

『氣にしない氣にしない

ルアルって、今年で何歳になるんだっけ？
なーんか幼稚な気が。

「ルアルさんは、今年で40歳ですよ？」
へえ、未だに独り身とはね……
まあ、でも……学園出て、まで2年しかたっていないから……仕方ない、のかな？

血圧紹介（前書き）

色々と短いです。

内容薄いです。

それでもいい、と書かれたのみだった。

後で、ちゃんと? 」で出てきた人の説明書きまさんで。

「俺がこの1年S組の担任、マコト・アラセだ！」
俺の給料が減るような事すんなよー？」

(— — ! !

え、何で日本人ネームwww

後で話聞いてみ。そういうよ。

あ、でもその前に寮で検索するか。
ま、どっちでもいいっしょ。

「んじゃ、それぞれ自己紹介しろよー。

名前と属性、攻撃タイプと一緒に、簡潔に頼むぞー

「メール・フレアだ！属性は火と風、攻撃タイプは武器による近距離攻撃！」

七大貴族とか、気にしないでくれよな！」

アランだ。弄るの決定だな。

……こうして見ると、メーバ家とボルト家が居ないんだ。
まあ、メーバは来年入つてくるけど。
リルも、いる。

「クルフィ・アクアです。属性は水と光、攻撃タイプは魔法と弓による魔弓攻撃。

私もアランと同じなので、気にせずに話しかけてくださいね」

「ミコル・ガイアだ。属性は土と氷、攻撃タイプは魔法による遠距離攻撃。

あーまあ、そのなんだ。俺もアランたちと同じなんだが……
俺から情報を買うときは、それなりの対価を持つてこいよ？」

「フィリア・フィル、属性は風と水。攻撃は体術と魔法による近距離か遠距離攻撃。

私もアランたちと同じだ。ようしぐ。

「リティウル・ドラグネス、です。属性は闇、火、風。攻撃タイプは中距離攻撃。

えと、僕もアランたちと同じなので、よろしくお願ひします。あと、私事ですが。口々に姉さんが居たら、早く僕の所に来て下さい。

約束、忘れたとは言わせませんから。」

私、そこまで薄情じゃないんだけどなあ。

忘れる訳。ないじやん。

てか、ほら。皆「え？姉？いないよね？」

って顔してんじやん。

アランたちはリルから聞かされてたのか、「またか」って顔してるけど。

さて、私の番。

「ベルレイン・フォン・イグルス・一キリル・イグヴィウです。

属性は水、風、土、氷、光、植物、時。

攻撃タイプは召喚又は魔法、武器による全距離攻撃

ここは学舎、身分制度は関係ありません。

なので、仲良くしてくださいね！あ、ベルって呼んでください。」

よし、第一関門クリア。
次は、リルに会うこと。

あ、そういえば何か忘れてる。

なんだっけ？

「ベル様！やつと見つけましたよ！」

「……あ、アルファさん。あ、皆さん、これからはアルファさんです。」

「え？あ、申し訳ござりません。アルファ・スラード、第一王女専属護衛騎士、攻撃タイプはまあいろいろです。宜しくお願いします。」

因みに。

この後、私はアルファさんからお小言を頂きました。

休み時間

「リル」

「あ、ベル様。どうかしましたか？」

「あー、ダメだ。様は止めようよ様は。ね？」

「ですが……」

「いいんじゃねーの?リル。」

「馬鹿は黙つてください。そうですよ。ベルがそう言つてくれたんです。」

……やっぱり、顔と声色変えてるから気がつかないか……
ま、コレで気が付いたらそれはそれで天才なんだけど。

さて、いつ……ばらそうか。

私としては、いつでもいいんだけど。

＜疾風。いつがいいと思つ?＞

＜そうですね……リル様が、諦めた時でいいんじゃないでしちうか?＞

疾風ナイス。

さて、聖靈にお願い!「リル様はここに留まして?」

……誰だよ、この女。

＜……疾風、検索。＞

＜解しました。＞

ヒットしました。

彼女の名前はリリナ・アンテスレン、闇系統の上級貴族の次女

です。

ギルドランクはB、魔力は五千六百万。属性は闇と雷ですね。性格は最悪のデロデロ、嫉妬心はハンパなく、欲深いです。そして、彼女はリルさんの婚約者の座を狙う人の一人ですね。蛇足ですが、マスターは七大貴族とギルド上層部、あとは白で働いてる者の家族にしか知られていないので、彼女はマスターが姫だということを知りません。>

へえ……色々とやつてそうだね、この子の家。

<疾風。アンデスレン家について調べて。>

<了解しました。

ヒットしました。

アンデスレン家、裏で奴隸・人身売買、麻薬取引、人攫いをしています。

また、アンデスレン家長女は、レーヴェ様と同学年で、婚約者の座を狙っています。>

やつぱりやつてるか……

これは報告だな。

「……リリナか……」

「リル様！ご機嫌麗しく存じますわ。それで、リル様？ 答えを聞いても宜しいでしょうか？」

「……僕は婚約者を取るつもりはありません。姉さんが見つかるまで。

……いえ、見つかっても。僕が結婚する人ぐらい、自分が決めます。」

……これでリルが婚約者を取らないのは私のせいだとか言つたら叩き潰すところだつた。

いやー、危ない危ない。

「……っ。何故ですか？ 私ではダメなんですか？」

「 そうだね。ハツキリ言うと、僕はリリナのことが苦手だ。」「 はうねーリル。でも、あんまハツキリ言つちやダメだよー? 」

「ベル。
でも……」

でもじゃない一つのWWW

それにしても、この女。

リ川にへ夕惚れたな。WWW

リバモ力変たVV

「そうですね！大体が、貴方は誰なんですか？」

リル様に敬語を使わないなんて…… とんだ無礼者ですわね。

その前。
私の前から離れてくらがふ...

貴族を前にしてそんな無礼をはたらく平民と一緒に居るな

んて、耐えられませんもの。」

出たよ高飛車　ｗｗ

本物を見ると……腹筋崩壊するなこれ　ｗｗ

「何かいつたらいかが？」

「ええ、では言わせてもらひうわ。あまりこいつこの好きではないんですけどね。」

まずは自己紹介と行きましょう。

私の名前は、ベルレイン・フォン・イグルス・ニキリル・イグヴィウ。

この国的第一王女です。」

「なつ！？あなた、ふざけるのも大概にしなさい！」

第一王女様の名前を名乗るなど……何を考えているんですの？！」

「……証拠を見ますか？私のうなじに、王族の紋章がありますから。」

これでも信じなかつたら、コイツ馬鹿だな　ｗｗ
いや、私が名乗つた時点で疑つ方が馬鹿か。

「……！本当にありますわ……！では、貴方……本当に第一王女なんですか？」

「……そう言つたじゃないですか。何ですか？疑いますか？」

てカリル達空氣　ｗｗ

「いえ……！申し訳御座いませんでした……！」

「……では。貴方の名前を聞いても宜しいですね？」

「はい！私は、リリナ・アンデスレンと申します！」

「……アンデスレン？そうですか、貴方が……」

「へ.どうかなさいましたか？」

「へ.どうかなさいましたか？」

「いえ、何でも。では、そろそろクラスに戻ったほうがいいのでは
ありませんか？」

「あ、はいっ！失礼します！」

「ええ。ああ、それから……」（ヒソ）貴方の家、危ういかもしれ
ませんよ？

私女優ww

アーデミー賞取れるでしょww

てか、最後の真っ青な顔ときたらww

この後、私はリルに凄く感謝されました。

「リリナの気を惹いてくださつて有難う御座います
だそうでww

休み時間（後書き）

誤字修正しました！

「マコト先生、話があるのでもうひと良いですか？質問で答えて欲しいのです。」

「おー？どうした？」

向かう場所は屋上。

屋上と言えば、告白の定番スポットだよね……
経験豊富な友達が言つてた気がする。
私は告白されたこともないし、
告白したこともないけど……
現場に居合わせた事はあるんだよな。
あのときは気まずかった。

「では、何の疑問も持たずに。質問するので、答えてくださいね。

問一。なくよ鶯？」

「平安京？あれ、平城京だつけか？」

「問一。源頼朝の弟はだれか。」

「源義経」

「問二。背水の陣の意味を答えよ。」

「決死の覚悟で物事に臨むこと。」

「問四。現在、ロシアと問題になつてゐる北方領土の名前をすべて
答えよ。」

「えーと……歯舞群島、択捉島、国後島、後は……色丹島？」

「うん、全問正解です。マコト先生、やつぱり日本人だったんですね。」

「？ああ、そうだが……ってなんでお前がその事知つてんだよ？」

！」

「あ、私、元の名前は月乙女颯華つていいます。

月乙女財閥次期当主で、緑桜女学院高等部一年でした。」

いやー、まさかほんとーに日本人とはねー。

偶然かなー?って思ったけど検索かけたらトリップしてたらし

某T大大学院生だつたらしいし。

どんだけ頭いいんだよww

「ちよい待て。緑桜女学院?月乙女?お前、超大財閥だろ?
何でこんなとこに居るんだよ。」

「神様が間違えて私を殺してチーン。」

「うわ……」

その同情するような視線やめて!
自分でももう諦めてるから!
結構イタイから、その視線!

「えと……とにかく、異世界出身だつてことは言つてないんですよ
ね?」

「あ、使い魔には言つてある。」

「いえ、そうじやなくてです。」

「使い魔以外には言つてないが?」

賢明な判断。

私が言うことじやないけど。
絶対信じてくれないしねー。

「兎に角、同郷の人をみつける事ができてよかったです!」

「おう、俺も寂しかったんだよなー、日本人居ないし。」

「私は元、ですか？」

「記憶あんたるーが

「まあ、一応？」

ちなみに、マコト先生がこの世界に来たのは、ほんの一、三年前らしい。

つーことは……今何歳だ？

24、5ぐらいかな？

私も精神年齢いはそんくらいかな？

もうちょっと上がかも。

「ま、これからよろしくな！」

「はい！」

うん、お兄さんみたいだ。

マコト・アラセさんはいい友達になる予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4360v/>

馬鹿で出来る創造神

2011年12月20日20時51分発行